

平成 28 年度 岡山大学大学院法務研究科
法学既修者入試 A 日程 試験問題

刑事法系（刑法、刑事訴訟法）

解答上の注意

1. 問題冊子は、表紙を含め 3 枚である。
2. 問題には、問題 1 と問題 2 がある。配点は、問題 1 が 60 点、問題 2 が 40 点である。
3. 表裏に解答欄がある解答用紙は、問題 1 用と問題 2 用の 2 枚が配布されている。各問題ごとに解答用紙 1 枚を使って解答すること。
4. 解答用紙の受験番号欄に受験番号を算用数字で記入し、また試験科目欄に「刑事法系」と記入すること。なお、整理番号等その他の記入欄には記入しないこと。
5. 試験終了後、問題冊子及び下書き用紙は持ち帰ること。
6. 解答の際は、黒又は青のボールペンを使用すること。
7. 試験終了後、解答用紙と貸与した六法を回収するので、指示があるまで席を立たないこと。
8. その他は、すべて監督者の指示に従うこと。

【問題 1】 次の事例を読んで、設問に答えなさい。解答用紙の冒頭に「問題 1」と記入すること。

[事 例]

甲と乙（いずれも 20 歳代の男）は、ある商店街で買い物中の女性客らの鞆などから財布をすり盗って得た金を折半しようという計画を立て、役割分担として、現場周辺を甲が見張りをし、乙がすり行為を行うこととした。

ある日の日中、甲と乙は上記計画に基づき、混雑している商店街に赴き、すり行為を行う相手となる女性を探していたところ、混雑している店舗で高齢の V 女が買い物をしているのを見つけた。そこで、甲と乙は、V 女にすり行為を行うこととし、甲が周辺を見張り、乙が V 女の背後から近づいて同女のすぐ後ろに立って V 女が左腕に掛けていた手提げ鞆のチャックを開け始めた。ところが V 女は乙の行為に気付き、咄嗟にその鞆を抱きかかえようとした。乙にとっては予想外の事態となったが、ここで逃げようとしてもすぐに通行人らに捕まえられてしまうと思い、機転を利かせて V 女の耳元で低い声で「声を出したら今ここで刺すぞ。バッグを放せ。」と申し向けて脅迫した。V 女は恐怖のあまり手提げ鞆を持っていた手の力を弱めたところ、乙はその鞆から財布を取り出し、そのまますぐに逃走した。

[設 問] 甲、乙それぞれの罪責を論じなさい（特別法違反の点を除く）。

《問題 1 以上》

《次頁に続く》

【問題 2】 次の事例を読んで、設問に答えなさい。解答は、【問題 1】を解答した用紙とは別の解答用紙に書き、冒頭に「問題 2」と記入すること。

[事 例]

警察官 P らは、A 市内の複数のコンビニエンスストアで連続して発生している複数犯による強盗事件を捜査していたところ、甲を含む数名のグループによる一連の犯行である疑いが濃くなってきた。ただ、甲以外にいかなる者が関与しているかは未だ明らかになっていなかった。そこで、P らは、甲の容ぼうと、甲宅に出入りする者の容ぼうをカメラで写真撮影してこれを被害者らに示し、犯人の特定を行おうと考えた。

そして、警察官 P らは、事前の内偵捜査で甲宅への出入りが最も激しくなるのは午前 9 時から午前 10 時の時間帯であることを確認した上、ある日の同時間帯に、令状を得ることなく、甲宅近くの公道に警察車両を駐車し、車内からカメラを甲宅出入口付近に向け、甲宅出入口とそのすぐ前にある公道が写るようにして甲宅に出入りした人物の容ぼうを写真撮影した。

[設 問] 警察官 P らが行った上記写真撮影は適法か。

《問題 2 以上》
《刑事法系問題 以上》

【出題意図】

問題 1

窃盗共謀後のいわゆる居直り強盗の事案を素材として、共犯の成立範囲，犯罪間の重なり合いなど，法学部の刑法において学修する基本的な事項に関する正確な理解をみるとともに、事例処理能力を試すものである。

問題 2

本問は、写真撮影の事案を通じて、強制処分と任意処分の区別の基準及び任意処分の限界について問うものである。